



細い道や坂が多いガムレ・スタヴァンガーの町並み

Europe's largest town of wooden houses, Stavanger

ヨーロッパ最大の木の家の町「スタヴァンガー」

ノルウェー・スタヴァンガー

Special Features / Civil Engineering Heritage VIII



FUJII Chiaki

特集
土木遺産 VIII
北の地に根付く文化(ノルウェー・デンマーク・スウェーデン・北海道)

株式会社エイト日本技術開発/技術本部/技術管理室
藤井千晶(会誌編集専門委員)

白壁の続く町並み

スタヴァンガーはベルゲンから南へ160kmのノルウェー南部に位置し、複雑な海岸線と緩やかな丘陵に囲まれ



図1 スタヴァンガー市街地図

た中世からの港町である。北海油田の基地としても知られる、人口約11万人のノルウェー第4の都市である。

スタヴァンガーはヨーロッパ大陸に近く、外海に出やすい立地のため、港町として古くから人が住んでいた。町の成立は1125年とされ、スタヴァンガー大聖堂を中心に現在の中心市街地が形成されていった。

この町に「ガムレ・スタヴァンガー」と呼ばれる一角がある。古いスタヴァンガーという意味だ。白い壁とオレンジ色の屋根が印象的な、美しい町並みが残っている。石畳が敷かれた細い道は緩やかにカーブし、両側に並ぶ家の壁には花や緑が飾られる。この家々は木造なのだが、古くは1700年代から今に至るまで住居として利用されているという。

木造家屋群の保存地区

ガムレ・スタヴァンガー地区は、港から一段上がった場所にあるのだが、奥行き100mほど、南北方向の幅も500mほどで、決して広くない範囲だ。ヨーロッパの歴史



写真1 港沿いの道から坂を上った一帯がガムレ・スタヴァンガー(右手)

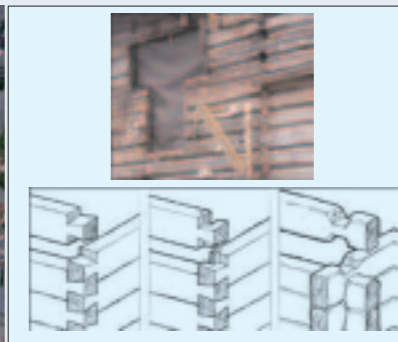


図2 1930年頃までに建てられた家に使われている釘を使わない木組みの壁構造

的保存地区といえば重厚な石造りやレンガ造りの建物のイメージだが、ガムレ・スタヴァンガーの建物は木造である。商業的な中心地でもなく、ところどころに手芸雑貨を売るお店などがあるものの、概して静かな住宅地である。一軒一軒の家を見ても、他にはないような変わった建物というわけではなさそうだ。

ところが、スタヴァンガーの町並み保存が始まったのは1948年であり、ノルウェーの中でも最も早い時期だという。フランスでも歴史的な街区保存や修復のための制度「マルロー法」が制定されたのは1962年のことである。

一つ思いつくのは北海油田だ。スタヴァンガーは北海油田への基地であり、世界中から石油に関係する企業と人が集まっている。その開発圧への抵抗だったのだろうか。しかし、石油・ガス開発が本格的にスタートしたのは1969年であり、既に町並みの保存・修復は着々と進められていた時期だ。

なぜ、この白壁の家が密集する小さな一角が残され、早い時期に保存されることになったのであろうか。

ニシンがつくった町

ガムレ・スタヴァンガーには173軒の伝統的な木造の家が密に並んでいる。最も古い家は1700年代の初めに建てられているが、今ある家屋の多くは1820~1860年代のものだ。

この時期、ニシン漁の活況により、スタヴァンガーには周辺から続々と人が集まってきた。もとは農民であった人たちが、故郷の木を切り出して運んできて自分達の家を建てたという。家の材料もろとも移り住んできたのだ。当時の家は、釘を使わず木を組みあげて壁を造るもので、北欧では古くからある手法だ。

町は港から坂の上へ自然発生的に拡大したため、ガムレ・スタヴァンガーの街路は曲がったり、行き止まったり、階段だったり無秩序である。家も一軒一軒、形や大きさが

少しずつ違う。それぞれの家は決して大きくなく、1軒の建築面積は27~80m²だ。当時、1つの家には大家族が住んでおり、家の中は非常に混み合っていたという。ほとんどが漁師の家族である。現在、市が関わって保存・修復を進めている家でも21名が住んでいたことがわかっている。この家も7~8m四方の2フロア

に、屋根裏部屋がある程度だ。

1870~1880年頃にはニシンの漁獲が減り経済的に低迷したが、1880年代から徐々にサーディン(小ぶりのニシン)の缶詰産業が発達し始めた。1900年頃からは缶詰作業の工業化や運送手段の発達により効率が上がり、「オイル・サーディン」に代表される缶詰商品は世界中へ輸出された。缶詰産業が盛況だった1920年代まで、スタヴァンガーの町中には缶詰工場の煙突が立ち並び、人口も増加した。

ガムレ・スタヴァンガーだけではない木造家屋群の町

実は、ガムレ・スタヴァンガーはスタヴァンガーの木造家屋群の中で最も古い地区というわけではない。ニシン漁で最初に発達したのは、海岸に張り付いた倉庫兼住居である。倉庫は水際に建てられ、船から直接荷物を出し入れた。

次いで、その後背地に住居地域と商業地域が形成されていったのである。

これが今でも中心市街地となっている場所である。ガムレ・スタヴァンガーから港を挟んで東側の半島部分である。古い木造家屋を活用した商店が並ぶ、雰囲気のある町である。

それだけではない。町はこの辺りを中心に次々と周辺に広がっていったため、中心市街地を囲んだ外側には、さらに広大な木造家屋群が広がっているのである。中心部に近いところから外側に向け、建築様式も街路の整



写真2 市がアドバイスをしながら進めている修復中の家



写真3 修復中の家の内部。建築当時の青い壁紙が残っていたため、保存すると共に、当時の壁紙を復元して使用する予定



写真4 かつての共同井戸。スタヴァンガーに上下水道が整備されたのは1866年



写真5 道の中央に車止めの石を設置し車両の通行を制限



図3 1815年当時の倉庫兼住居は260棟あり、現在でも60棟が残る



写真6 (左) 水際に建てられた倉庫兼住居 (スタヴァンガー博物館展示資料)



写真7 (右) 倉庫兼住居の内部構造 (スタヴァンガー博物館展示資料)。右の海側に倉庫部屋、作業部屋、山側の奥に事務所や居室が連なる細長い造り

備方式も徐々に近代的なものになっていく。

スタヴァンガーは、市全体で約8,000もの古い木造家屋が残る「ヨーロッパ最大の木の家の町」なのである。約8,000という数は1950年頃までに建てられた家屋を数えたものだ。

年中暖房が必要な北欧では、都市の歴史は大火災の歴史でもある。しかし、スタヴァンガーでは比較的火事が少なく、第二次世界大戦で空爆が無かったことも幸いし、これだけの木造家屋群ができあがったのだ。

広大な保存地区

第二次世界大戦が終わるまで、人々はごく普通のこととして木の家に住み続けてきた。しかし戦後は、近代的な建築と都市計画が“良し”とされる時代となり、スタヴァンガーでも古い建物を壊し、新素材を駆使した最新のデザインの町にする方向に向かったのである。1946年には中心市街地を再開発する計画が持ち上がった。

特に、現在のガムレ・スタヴァンガーのあたりは、少し寂れており、建物のメンテナンスもされていないものが多かったという。そんなこともあり、これらの木造家屋群を一掃し、工業地区を建設する計画もあった。

しかし、この計画に異を唱えた人物がいた。市の職員であり建築が専門のピーアンティクヴァー・エイナツグ・ヘッデンである。ヘッデンの主張により1948年には計画が中止され、古い町並みを保存することになった。多くの議論はあっただろうが、市が二分されて激しく対立するようなことはなかったようだ。市民にとって愛着のある町並みを保存することは自然なことだったのだろうか。

保存が決まり、ヘッデンを中心として市は都市計画を練り直した。最も古い倉庫群をはじめ古い建物の調査を行い、まず1951年に33軒の建物を修復する計画を立てた。この計画は、1956年に議会で正式に可決されている。翌年、木造家屋群修復のための資金調達組織フォレイニンゲン・ガムレ・スタヴァンガーが設立された。その後、保存・修復の対象は拡大され続け、最終的には、港を中心に半径2kmにわたる範囲が指定されるに至っ

ている。

スタヴァンガーの歴史的保存地区はガムレ・スタヴァンガーの小さな一角だけではなかったのである。ガムレ・スタヴァンガーはその保存・修復が始まった象徴的な場所であり、スタヴァンガーの古い町並みの特色と風情を良く残す場所として、また、ノルウェーの町並み保存・修復活動の礎として、敬意を払われているということなのだ。

単純明快なルール

木造家屋群の保存・修復に関するルールは市の都市計画条例に含まれる。景観保全方針というべき7条の条文だ。都市計画に関する上位法令はあるものの、スタヴァンガーの歴史的保存地区に関する法令はこの7条だけで、他には無い。文字にして1,300字程度、A4サイズの紙に印刷しても半ページにもならない。

内容は単純で、建物の外観を変更する場合は市に申



写真8 埋め立てで水際からは離れたが、滑車をつけた切り妻屋根がその面影を残している

請しなければならず、申請書にはその変更が「より伝統的になる」という根拠を添付しなければならない。変更は、その建物のオリジナルの姿に近づけること、周辺の建物の様式に配慮することとされている。

指定された地域では、建物の変更を禁止されているのではなく、外観について材料を含めて昔のスタイルに戻すのであれば何をしていても良いという。そのため市は、建物の外観を変更したい家主には、まずその家の昔の絵や写真を探すことを推奨している。また、市の歴史地区保護局では、地区ごとの建築様式の特徴を示すパンフレットを作成し、相談者には技術的なアドバイスや職人の紹介などを行っている。保存・修復が始まった当初は補助金も出ていたが、今では、修復費は基本的に持ち主の負担である。

わずかなルールだけで、外壁はもちろん、ドアや窓枠の中の格子の入れ方、窓の開く方向まで、より昔の姿に近づけ続けている。もし、家主から提出された変更案に反対意見が出された場合は、住民投票を行って決めるという。このようなことが可能なのは、文化的素地として「明快なルールを決め、決めたことは決めたこととして当然守っていく」という意識が強いのであろう。

保存意義の原点

ガムレ・スタヴァンガーを代表とするアンティークな町並みは、スタヴァンガーのアイデンティティの一つとなった。代々家を受け継ぐ人も、町並みに魅了されて移り住んできた人も、木造家屋群を残すことを決めた人々の先見の明と勇気を感じているのではないだろうか。

ここで大事な点は、特定の文化的価値の高い建物を保護するのではなく、地域の町並み形成に貢献する民家など、広義な歴史的建造物群をまとまりのある地区として指定し、一つ一つの建物を少しずつ、よりオリジナルの姿に近づけるという考え方であろう。

スタヴァンガーは、これまで取り上げてきた土木遺産とは趣を異にしているかもしれない。特定の構造物があるような土木遺産のイメージとは異なる。しかし、一つの考えとして、日本においても観光化目的だけではない、愛着のある伝統的町並みの保全が定着してきた今日、スタヴァンガーの保全と活用のあり方は、その意義と原点を確認できる貴重な現役の土木遺産になっているのではないだろうか。



写真9 中心市街地の木造の商店街



写真10 1880年代～1910年代頃までに造られた地域

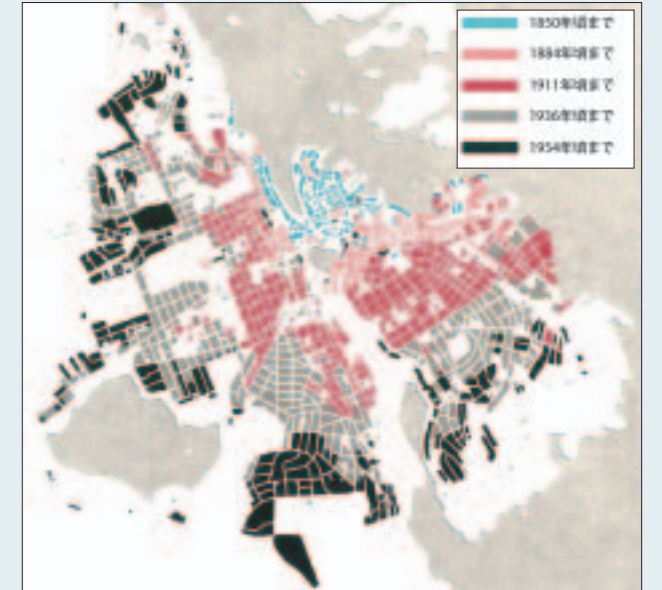


図4 町の成立年代。時代が下るにつれ、水色の中心部から放射状に広がっている

- <参考文献>
- 1) [Stavanger and its surroundings -European capital of culture 2008] Véronique Mignot-Bari 2008年
 - 2) [Stavanger -Past, present and future-] Stavanger Kommune Department of Culture and Urban Development 2009年
 - 3) [Trehusbyen 8000 Trehus + Ditt -Europas Storste Trehusbyggelse] Stavanger Kommune
 - 4) [Welcome to a walk in the city center of Stavanger] Stavanger Kommune 2008年

- <取材協力・資料提供>
- 1) スタヴァンガー市都市計画局 (Stavanger Kommune, City Planning Office)
 - 2) スタヴァンガー博物館 (Stavanger Museum)
 - 3) Mariko K. Hauge (通訳ガイド)
- <写真提供>
- P8上 佐藤尚 写真1、10 スタヴァンガー市 写真7、8、9、11 藤井千晶
写真2、3、5、6 塚本敏行 写真4 佐々木勝 写真12 中村和也
図1: 藤井千晶
図2、3、4: スタヴァンガー市



写真11 花や緑が映えるガムレ・スタヴァンガーの町並み



写真12 防火のため見張りが常駐した塔。中心市街地の一番高い場所に建つ